

特集にあたって

本特集「日中関係史共同研究」は、神奈川大学人文学研究所日中関係史研究班の共同研究成果として、近代以降の日中間の人的交流、その歴史を伝える史料と記憶、さらに研究継承をめぐる論考と記録を収録する。各稿は、日中関係史研究を支える資料・人・交流のあり方を多角的に示している。

まず、「浙江工商大学主催『清末浙江留日学生群体研究』国際シンポジウム参加記」として、2025年8月21日から23日にかけて、中国浙江省杭州市の浙江工商大学で開催された国際シンポジウムに関する五篇を掲載する。同シンポジウムは、浙江工商大学が進める「浙江文化研究工程」の一環として開催され、中日韓の研究者が参加した。会議では、清末を中心とする中国人日本留学生の出身地域、留学経路、専門教育、人的ネットワーク、帰国後の活動などについて、多角的な報告と討論が行われた。

高田幸男は、会議の開催経緯と全体像を紹介するとともに、浙江工商大学における史料収集、留学生データベースの構築、日本語史料の解説、若手研究者の育成などの取り組みを論じている。山本一生は、東洋大学の日清高等学部を事例として、学籍簿をはじめとする大学史資料を用い、受け入れ側から中国人留学生の実態を明らかにする可能性を提示する。郭夢垚は、「近代中国留日学生データベース」を用いた数量分析と社会ネットワーク分析を取り上げ、ビッグデータによる留学生史研究の新たな展開と課題を検討している。見城悌治は、浙江省出身の留日医薬学生と近代医学教育との関係を論じるとともに、中国における日本語史料の読解教育と研究基盤整備の進展を紹介する。孫安石は、『近代浙江留日学生与中日文化交流』を取り上げ、浙江省の府県、学校、専門分野に即した研究成果を紹介しつつ、地方留学生史研究の分析単位とその限界について問題を提起している。

これらの諸稿からは、中国人留学生史研究が、人物や政治運動を中心とする研究から、出身地、家族、学校、専門分野、経済関係、社会的ネットワークを含む、より多層的な研究へと展開していることがうかがえる。また、中国側の地方史料や人物資料と、日本側の学籍簿、学校資料、外交文書などを照合することで、一方の史料だけでは捉えられない留学生の実像を再構成する重要性も示されている。

続く「宮崎黄石オーラル・ヒストリー」は、宮崎滔天、龍介から宮崎露岑、黄石へと受け継がれてきた中国との関係を、家族の記憶と本人の経験を通して記録する。辛亥革命期に形成された人的関係が、戦前・戦後を通じていかに継承されてきたかを、当事者の語りと所蔵資料から明らかにしている。

「阿部洋先生を偲ぶ会の記録——一周忌追悼の集い——」は、中国人留学生教育史、日中教育交流史および東アジア教育史研究の発展に大きく貢献した阿部洋先生の学問的業績と人柄を、門下生や研究関係者の証言によって伝えるものである。また、阿部先生が重視した史料の収集と共有、組織的な共同研究、若手研究者の育成、国境を越えた研究交流という姿勢は、本研究班の活動にも深く通じている。

本特集に収録した各稿は、国際シンポジウムの参加記、研究動向の紹介、オーラル・ヒストリー、追悼記録という異なる形式をとっている。しかし、いずれも日中関係を形づくってきた人々の活動を記録し、史料と記憶を保存し、研究を次の世代へ継承するという共通の問題意識に基づいている。本特集が、近代中国人留学生史および日中関係史研究の現在地を示すとともに、異なる史料、方法、世代を結びつけ、今後の共同研究をより具体的な形でさらに発展させる一つの契機となれば幸いである。

郭 夢垚（神奈川大学）